

## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2863 号	氏名	吉岡 慎一郎
審査担当者	主 査	矢野 博久	(印) 野
	副主査	緒方 裕	(印)
	副主査	溝口 充志	(印)
主論文題目： Advanced Endoscopic Features of Ulcerative Colitis-Associated Neoplasias - Quantification of Autofluorescence Imaging (画像強調内視鏡による潰瘍性大腸炎関連腫瘍の観察-自家蛍光イメージングの定量化)			

### 審査結果の要旨 (意見)

炎症性腸疾患の1つである潰瘍性大腸炎 (UC) は、長期の持続する炎症のため大腸/直腸癌を発症する危険性が高く、その早期発見は患者の予後向上に重要である。今回、11人のUC患者から採取された15病変 (癌7病変、高度異形成 (HGD) 8病変) を、通常の内視鏡観察に加えて、3種類の特殊な方法 (拡大 chromoendoscopy (CE) 観察、narrow band imaging (NBI) 拡大観察、autofluorescence imaging (AFI) 観察) を用いて観察し質的診断を試みている。その結果、正診率は、CE観察が86.7%、NBI観察が63.6%、AFI観察が37.5%と言う結果であった。AFI観察は更に、G/R比を8症例で算出して検討したところ、癌/HGD部が、非癌/HGD部 (UC部と非UC部) に比べ有意に低い値を示すことを初めて明らかにした。UC関連の腫瘍性病変の早期発見に役立つ方法を明らかにした重要な研究であり、学位論文として極めて価値の高いものであると判断する。

### 論文要旨

潰瘍性大腸炎 (UC) 関連腫瘍の診断における画像強調内視鏡の有用性を検討した。久留米大学病院で診断されたUC関連腫瘍のうち11症例15病変について、内視鏡による通常観察、拡大観察、画像強調観察を行ない、その結果を解析した。男性7例/女性4例、発症年齢中央値63歳、病悩期間中央値14年であった。すべて全結腸型で、腫瘍部位は直腸が10例と多く、病理組織は高度異型8病変/癌7病変、肉眼形態は隆起型7病変/平坦隆起型6病変/平坦型2病変、色調は褪色調1病変/同色調5病変/発赤調9病変であった。拡大内視鏡のpit pattern分類ではⅢL型5病変/Ⅳ型7病変/Ⅴ型1病変/分類不能2病変で、narrow band imaging 拡大観察ではCP-I型1病変/CP-II型3病変/CP-Ⅲa型7病変であった。autofluorescence imaging (AFI)観察の定量分析 (G/R ratio) では、腫瘍0.86/炎症粘膜1.21/正常粘膜1.08と、腫瘍部位では周囲炎症粘膜や正常粘膜より有意に低値であった。UC関連腫瘍の発見には、多くの情報を統合した丹念な観察が必要で、特にAFI定量化が腫瘍判定の補助診断として有用であった。